慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昔の農業(中井信彦著, さ・え・ら書房刊)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.89(587)- 90(588)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

昔の農業（中井信彦著 さ・え・ら書房刊）

この本―「昔の農業」―は〝ぼくたちの研究室〟シリーズの一冊として、少年向に書かれたもので、昨年六月十五日の刊行になる。したがつて、いま特にこれをここにとりあげて紹介するのは、内容の面からみて必ずしも適わしいとはいへないかも知れない。その上、少しく時宜を失したうらみもあらう。けれども、學者達の專門的研究の成果を誰にでもわかるやうにやさしく、しかも飽くまで正しく一般に說き聞かせるといふことも、もとより決して無意義ではない筈である。

そして、この點、本書は充分信頼に足る推奬すべき少年讀物となつてゐる。このため、この六月には、產業經濟新聞社からこれに兒童文化賞が與えられもした。卽ち、敢えてここに紹介する次第である。

內容は、われわれの日常生活にきつてもきれない稻の話をはじめ、その他の畑作物やら、綿、藷、薯、絹、家畜等について、それらのわれわれと關係をもつようになつたそもそもの經緯から變遷、及びわれわれの祖先のそれらをめぐる働きのかずかずやを、われわれの生活に卽して物語りつつ、たのしく讀ませて實に興趣が深い。專門家からすれば、もちろんなんら格別のこともないのであらうが、かうした庶民の生活の歷史といふものはこれまでの普通の史書ではとかくなおざりにされがちであつたし、事實不明のふしも少なくなかつたやうである。それを、なんにしてもこのやうに一應筋を通して、それも子供にもよく理解の出來るやうにまとめあげたことはやはり一つの業績といつていいかと思う。敍述も、少年少女を目標としているだけに、むずかしい事柄をつとめて平明に要領よくしたためて飽かせないものをもつている。

〝一農業のあけぼの〟を說明するにあたつて、〝稻のふるさと〟から島崎藤村のヤシの實の詩をひき〝流れついた稻〟にいい及んだり、〝初めのころの田〟にまず一茶の句から田每の月を說きおこしたり、或は〝二鐵のくわ〟について述べたあとで〝鐵のくわが日本の國を建てた〟と、いかにも思いきつたひきつける小みだしを揭げたり、〝んくさい話〟と題して肥料の發達を記すなど、なかなかしやれたものといへやう。上代の農業についての〝三登呂遺跡の田〟、中世の農業についての〝四淸少納言の見た農業〟畑作物の發達についての〝五狂言「うりぬすびと」〟などといつた題のつけかたも同樣、もつぱら親しみ深く興味を呼びやすい工夫がこらされている。

そればかりではない。文章の隨處に自然著者の人柄がにじみ出

て、例えば「外國人と手をつないでゆくことは、學問の發達のためにも、どうしても必要なのだ。」（一三頁）とか「こうした生活の安らぎの上にだけ、文化はさかえてゆくのである。」（二〇頁）とかいつた發言もみられ、ただに「昔の農業」についての知識を與えるだけに止まらず、もつと廣く子供達の心を溫く育くむような心組もそれとなくうかがへる。もつとも、かうした點については、人によりいろいろと是非の論があるかも知れないが、少年少女のための讀物としては一應そんなことも望まれるわけであらうし、その意味でもこれは概ね當を得た立場にあるものと考へられる。

ともあれ、庶民史科研究の專門家中井信彥氏の手で子供向のそれもわれわれの生活に最も密接な關係がありながら、それでいて比較的新しい分野の良書がここに一つ加へられたことは喜ばしいことである。いや、强いて少年少女のみに限らず、これは專攻を異にするものなら大人といへども讀んで面白く、敎へられる本だといつても過言ではなからう。幸い、卷末には〝父兄のための參考書〟として、より深く知らうと希う人々への手引も示されてゐる。行屆いたものだし、さらに挿圖も豐富で深い興味を覺えさせられる。

もし、かりに難を探せといふならば、惜しむらくは、僅かながら誤植の若干あることで、子供向の讀物であるだけに、再版では是非改めてほしいものである。

なお、本書の姉妹篇ともいふべき「昔の工業」、「昔の商業」も目下執筆中ときく。期待したい。（會田倉吉）

最近の新中國史學發展の概況

宮島貞亮

方回氏は去年十月、光明日報副刊史學第十四號紙上に「解放四年來新中國的歷史科學發展概況」の一文を揭載し、最近の新中國に於ける史學發展の概況を公にした。方回氏は如何なる士か、譯者は寡聞にして之を知ることも出來ないが、何れにせよ少壯の史學研究者であることは察知するに難くない。

最近中國は新舊に分れた。中國を愛する者にとり限りなき寂しさを感ずる。中國は永い間、その悲運に苦しみ、惱み、悶えぬいてきた。近代の文學はまさにその苦惱を如實に表はしてゐる。寔にそれは苦惱の歷史である。そしてその文學は政治に直結してゐるのが特色である。從來私共は中國の苦惱を理解することも出來ず、又理解しようともしなかつた。然し慘憺たる敗戰により目ざめた私共は、今更のやうに漸く理解しようとする意欲を持つようになつた。おそまきながら好い傾向といはなければならない。變轉きわまりなかつた中國も苦鬪の曉、漸く近代的國家になつたが、それとともに、新舊に分離するに至つた。中國にこよなく愛着を有する私共は寔に涯りなき淋しさを感ずる。中國の命運は我